

2017年06月30日

博士学位審査 論文審査報告書（課程内）

大学名 早稲田大学
研究科名 大学院人間科学研究科
申請者氏名 高梨 知揚
学位の種類 博士（人間科学）
論文題目（和文） がん緩和ケアにおける多元的医療としての鍼灸の意味
論文題目（英文） Meaning of Acupuncture and Moxibustion in Pluralistic Medical System of Cancer Palliative Care

公開審査会

実施年月日・時間 2017年06月20日・18:00-19:00

実施場所 早稲田大学 所沢キャンパス 100号館 第四会議室

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	辻内 琢也	博士（医学）	東京大学	医療人類学
副査	早稲田大学・教授	小野 充一	医学博士	東京医科大学	緩和医療学
副査	早稲田大学・名誉教授	蔵持 不三也	博士（人間科学）	早稲田大学	文化人類学
副査	森ノ宮医療大学・教授	山下 仁	博士（保健学）	東京大学	臨床鍼灸学

論文審査委員会は、高梨知揚氏による博士学位論文「がん緩和ケアにおける多元的医療としての鍼灸の意味」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

1.1 質問：本論文結論部分の「承認された多元的医療の実践」とは一体誰に承認されることか？

回答：医師を中心とした他職種のことである。調査の中で、医師に認められることで安心して鍼灸を受けられるという語が見られたこと、また多くの患者が補完代替医療の実践の際に医師や他職種に言わずに「隠れて」実践していることがその理由であ

る。

- 1.2 質問：論文で扱っている施設では医療保険を用いて鍼灸治療が行われていると記述されている。医療保険での鍼灸治療はスタンダードなことなのか？

回答：在宅での鍼灸治療においては医療保険を用いたものが多い。ただし、保険が適応される疾患が限定されていることや、医師の同意が必要であるという前提において鍼灸を使いづらいという現状も一方である。

- 1.3 質問：第三部で扱っているクリニックで得られた知見は、一般化可能なデータなのか？他の施設での緩和ケアにおける鍼灸師の実情はどうか？

回答：研究対象としたクリニックは完全にチームケアが確立している施設であった。患者が亡くなっていく過程をチーム全体として自然に受け止めるという土壌の中で鍼灸師は鍼灸治療を実践していた。著者は他の施設でもフィールドワークを行っていたが、そこでの鍼灸師は他職種との関係性も希薄であり、第三部で対象としたクリニックの様相とはまた異なっていた。したがって、同クリニックのデータはある意味では特殊な場のデータであると考えられる。緩和ケアにおける鍼灸師の実情は所属している場の影響が大きいと、本論文の知見は、現段階では一般化は難しいデータであると考えられる。

- 1.4 質問：査読者が鍼灸治療に関与している緩和ケア病棟では、キーパーソンとなる看護師がいる。これまでの経験から、鍼灸が緩和ケア領域に関わるにはキーパーソンとなる存在が重要だと考えているが、今回の調査において鍼灸師にとってのキーパーソンは誰か？

回答：今回の調査先のキーパーソンは1名の医師であった。鍼灸師は頻繁にその医師の拠点に顔を出して関係性を構築していた。クリニックにおける他職種との繋がりはその医師をきっかけに作られていた。

- 1.5 質問：査読者の経験で、緩和ケアの一貫として患者を紹介した鍼灸師が、自身が「がんサバイバー」であり、患者に対して「攻めてしまう」タイプ（がんを克服させたいという意志をもったタイプ）の鍼灸師であり、患者との関係性がうまくいかなかったことがある。いわゆる鍼灸師の治療モデルと、患者の要求が合わない場合はどうなってしまうと考えるのか？

回答：著者の調査過程で出会った鍼灸師は、皆、患者を積極的に治そうとする姿勢はとっていなかった。したがって、そのような「攻めてしまう」タイプの鍼灸師には遭遇していないため、そのような場合に患者との関係性がどのようなようになるかについては回答が難しい。

- 1.6 質問：今回の調査では、「がんそのものが治る」あるいは「長生きする」という期待を持つ患者は対象となっていないのか？

回答：本研究で扱ったがん患者のほとんどが終末期へと近づく自分自身の状態を認識していたと考えられる。予後の明確な告知をされていなくとも、薄々と自分の死期について気づいている患者もおり、鍼灸治療によって「がんが治る」とまでの期待をもつ患者はほとんどいなかった。ただし、1名のみ、本論文の調査データにも示したが、「治る」ことを希望する患者はいた。その患者に対して、本研究で扱った鍼灸師がと

った対応は、「治る」という期待に直接応えるのではなく、苦悩の訴えに対して丁寧に傾聴することにつとめ、患者が精神的に落ち着くのを待つというスタンスで向き合っていた。

2 公開審査会で出された修正要求の概要

2.1 博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。

- 2.1.1 引用文献の著者名以外の登場人物名が、仮名であるのか実名であるのかを示すべきである。
- 2.1.2 論文の中では、「東北地方のA県池城市にあるひろせクリニック」のように、対象施設の地域特性が詳細にわかるデータが示されており、匿名化が無意味となっている。フィールドワークを行った場として重要な場である上、そして論述と調査データに真実性・説得力をもたせるためには、地名やクリニック名に関しても実名表記にすべきであろう。学術論文である以上、その研究・調査データはあとに続く研究者の批判や再検討・再調査を可能にするものでなければならない。
- 2.1.3 本論文は高梨氏の修士論文の発展形態と位置づけられるが、この博士論文では修士論文をいかに修正・補足し、新たな知見やデータによってそれをいかに発展させたかを概略でよいので明記してほしい。
- 2.1.4 誤字脱字等の表記ミスをいくつか見つけているので、修正してほしい。

2.2 修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。

- 2.2.1 本研究は原則仮名を使用しており、論文目次の最後の部分に「凡例」として地名や人物名が仮名である旨を記載した。
- 2.2.2 本調査では、研究対象となる施設や人物に不利益とならないように、研究倫理委員会に申請する段階で仮名を使用することとして許可がおりている。対象施設や個人が特定される可能性のある記述箇所については再度見直し、匿名性が確保されるように修正した。人類学調査としては実名を出すことが望ましいが、研究倫理委員会で許可を得るという観点からは、実名を出すことは大変難しいと考えている。今後の調査においては、この点について再検討していきたい。
- 2.2.3 中間報告会で発表した段階では、論文の本文の一部に修士論文の内容を記していたが、最終的に提出した論文では序論に修士論文の内容をすべて位置づけた。この点については記述してあるが、改めて明確に序論に追記した。
- 2.2.4 指摘されたとおりに修正をおこなった

3 本論文の評価

3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：

本論文は“緩和ケアにおける多元的医療としての鍼灸の意味”を探索することを研究目的として、次のような2つの明確なリサーチクエスションを立てている。①緩和ケアにおける他職種と鍼灸師の関係性を明らかにすること、②治療の場の観察から考

えられる患者にとっての鍼灸の「意味」を明らかにすること、以上の2つである。

この2つのリサーチクエスションは、多元的医療の中で鍼灸がどのような位置づけをされるのか、というマクロの視点にたった鍼灸の「意味」を明らかにするものと、治療が行われる場の詳細な分析というミクロの視点にたった鍼灸の「意味」を明らかにしようとしており、研究目的を2つの異なった次元から明らかにしようとしており研究として妥当性があると評価できる。

3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：

本論文では、上記に示した2つのリサーチクエスションに対して応えるために三部構成となっている。第一部においては、リサーチクエスションを提示して問題の所在を明らかにした上で、研究の理論的背景となる緩和医療・医療人類学・鍼灸学の多領域にわたった先行研究を英文論文も含めてレビューしており、さらに研究方法論が明記されている。第二部においては、上記①のリサーチクエスションに応えるために、2つの量的・質的調査研究の成果がまとめられている。第三部においては上記②のリサーチクエスションに応えるために、1つのフィールド調査に基づくエスノグラフィーが描かれている。このように、研究目的を明らかにするために、3つの異なる調査方法を複合的に用いており、研究計画や分析方法としても妥当だと評価できる。

本論文第二部における2つの調査は、どちらも量的調査と質的調査を混合させた手法を用いており、「在宅療養支援診療所」と「病院」という2種類の対象機関を設定し、さらに、それぞれの対象機関における鍼灸師と医師を含めた他職種との関係性を、鍼灸師側からの観点と他職種側からの観点という双方向の視点を踏まえた調査を行っている点も優れた研究だと言える。職種間との関係性を多面的に捉えるためには、この量的および質的研究をあわせた研究方法と、2つの対象機関の設定と、鍼灸師と他職種の双方の視点を調査したという点で、妥当な対象および研究方法の選定だったと言える。また分析方法においても、各現象のプロセス性と関係性を重視する **Grounded Theory Approach** を用いており、「関係性の構築」という現象を紐解く上で妥当な分析方法が選択されていると言えよう。本論文第三部における調査では、治療現場の参与観察に基づくエスノグラフィーの手法を用いている。著者自身が鍼灸師であるため、同調査はまさに微視的な自文化研究だとも言える。参与観察においては、著者は現場のやり取りには関与しないことに努め、徹底して観察するというスタンスが取られているが、自文化を客観的に観察し、自文化を相対化するための手法として適切なものだと考えられる。

なお、本論文で実施した調査の手続きについては、著者が勤務する東京有明医療大学倫理委員会での倫理審査を受け承認されたものである（有明医療大倫理委承認第39号、第40号、第60号）。調査の前には対象者に対して調査内容についての十分な説明を行い、調査対象の人権や利益を遵守しインフォームドコンセントが得られた上で実施したとされており、倫理的な配慮が十分になされていると評価した。

3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：

本論文第二部においては、調査フィールドの医療文化の上に成り立つ鍼灸の「意味」というマクロな視点からの「意味」について論考がなされており、緩和ケアにおける

多角的医療としての鍼灸の実態が明快に描かれている。論文に記載された他職種と鍼灸師の関係性については、「中心」と「周縁」という構造的仮説を用いて他職種と鍼灸師の関係性を説明し、同内容を明確なシェーマを作成・提示することで視覚的によりわかりやすいものとしている。

第三部における在宅緩和ケアにおけるエスノグラフィーにおいては、膨大なローデータを用い、また詳細なインフォーマントの言説分析を重ねながら、臨場感あふれるモノグラフとして描き出している。同内容では現場の多様性をありありと描く一方で、患者に共通して観察された「軽くなる」という身体感覚の変化の現象に焦点化した論考を行い、鍼灸治療の「効果」とは異なる次元において、鍼灸の「意味」が明確に整理されている。

このように本論文では、ひとつひとつの論理が丁寧に積み上げられ、適切な手順で研究成果が明示されていると評価できる。

- 3.4 本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。
 - 3.4.1 本論文は、鍼灸師である著者自身が自文化を描くという、著者でなければできなかった調査研究という点において大きな独創性が認められる。
 - 3.4.2 これまでに、鍼灸の現場を描いたモノグラフは極めて少なく、さらに緩和ケア領域に特化したモノグラフは見当たらないという点でも独創性がある。
 - 3.4.3 本論文の第三部エスノグラフィーで描かれている「軽くなる」という現象の発見は緩和医療の観点からも極めて新規性があるものであり、緩和ケア領域における鍼灸の新たな「意味」に迫った点として評価できる。
 - 3.4.4 文化人類学の観点から「通過儀礼」のパラダイムを用いて、鍼灸の儀礼的側面を描き出した部分についても独創性がある。導かれた結論は予測できるものではあるが、「資料性」という意味では極めて重要なモノグラフとして描かれている。
- 3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。
 - 3.5.1 臨床鍼灸学の学術的観点から、本論文において描かれた現場のリアリティは多くの鍼灸師が共感しうるものであり、今後鍼灸師が緩和ケアの領域に関わっていく上での鍼灸の「意味」について考える際や、鍼灸師が抱える葛藤とその解決策を考える手がかりにする際に、学術的かつ臨床的に重要な意義があると言える。
 - 3.5.2 近年の臨床鍼灸学は、医学界をはじめとする他職種に認めてもらうために、鍼灸治療の「効果」というエビデンスを求めた研究が主流になっている。そのような社会情勢の中で、本研究が鍼灸の「意味」を問うナラティブを追求した研究であるという点で、大きな社会的意義がある。
 - 3.5.3 文化人類学の学術的観点からも、鍼灸の臨床現場を克明に描き、多角的医療としての鍼灸の「意味」を示す学術的価値のあるモノグラフとなっていると評価できる。
 - 3.5.4 緩和医療学の学術的観点から、本論文において発見されている鍼灸治療によって心身が「軽くなる」という現象の発見は、身体症状を含め数々の「重いもの」を背負うがん患者にとって極めて価値の高いものだと考えられる。このような知見

が、今後緩和ケアの現場に浸透することで、鍼灸が関与する「意味」を他職種に明快に提示できる可能性があり、鍼灸師の緩和ケアにおける役割（アイデンティティ）の形成という意味でも社会的意義があると言えるだろう。また、患者の背負う「重さ」への視点が、緩和ケアに携わるさまざまな職種の中で生まれることも期待できる。

- 3.5.5 医療人類学の学術的観点からは、我が国における鍼灸を含めた東洋医学をフィールドとした詳細なエスノグラフィーは、1980年代に行われた医療人類学の大家であるマーガレット・ロックと大貫恵美子によるものを最後に認められておらず、その点からも本研究は極めて重要な価値をもつものである。
- 3.6 本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。
 - 3.6.1 本論文では、医療人類学、文化人類学、臨床鍼灸学、緩和医療学といった学際的知見を援用し、ケアという文脈における人間同士の相互交流を複合的な視点で描写しており、まさに人間科学にしか成しえない価値のある成果だと言えるであろう。
 - 3.6.2 本論文においては、緩和ケアという場における鍼灸を通じた人間のケアの営みを、他職種と鍼灸師の関係性におけるマクロの視点からの鍼灸の「意味」と、緩和ケアを受ける患者にとってのミクロな視点からの鍼灸の「意味」を描いたものとなっている。本論文により得られた知見は、人間によるケアの多元性・多相性を示すものとして人間科学的意義があると言えよう。

- 4 本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。
 1. 高梨知揚・西村桂一・辻内琢也、2016、鍼灸師と連携している在宅療養支援診療所医師らの連携経験の実態調査—在宅緩和ケアにおける連携経験の語りの質的分析を中心に、全日本鍼灸学会雑誌、66(2)、90-100（原著：査読有）
 2. 高梨知揚・西村桂一・前田樹海・辻内琢也、2015、緩和ケア病棟を有する医療機関での鍼灸治療の実態調査、Palliative Care Research、10(1)、329-33（短報：査読有）
 3. 高梨知揚・西村桂一・辻内琢也、2014、末期がん患者ケアを実践している在宅療養支援診療所医師と鍼灸師の連携に関する調査、全日本鍼灸学会雑誌、64(4)、196-203（報告：査読有）

5 結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以 上